シリーズ
虹色のひろば

「担任として、チームで動くこと・連携すること ～使える資源は何でも使う～」

齋藤　理一郎　（群馬県立太田フレックス高等学校）

複雑化する高校生を取り巻く状況

最近の高校生を取り巻く状況は、今までに増して厳しい。彼ら・彼女らにとって、家庭はもはや安住の地とは限らない。SNS の普及で、生徒の交友関係は目に見える範囲には収まらない。ネット上で知り合って、顔も知らないのに気が合った相手を「カレシ・カノジョ」と呼ぶ生徒もいたりする。経験を積み重ねてきた大人でさえもストレスフルな社会で心身の調子を崩す中、高校生もまたメンタル面で不安定な毎日を送っている。その捌け口として現れる逸脱行動も、根深かったり複雑化していたりして、解きほぐすのが難しい。

担任ひとりでは背負えない

一人ひとりの生徒が、それぞれの困難の中で日々を生きている。そんな高校生が集まったクラスを、担任一人で背負うのは、もはや人間業の域ではない。以前から言われていた、「チームで動く」ことが、今後はよりいっそう求められる。担任と副担任が。学年団で。生活指導や教育相談の分掌と協力して。または、医療や福祉や行政や地域 NPO などの外部団体にお願いして。生徒から見れば、たった一人の「担任の先生」なのだから、「使える資源は何でも使う」ことで、目の前の生徒の日常を守りたいと願う。

連携の理解が深まらない職員室

ところが、この「チームで動く」「連携する」という意識は、なかなか職員室に浸透しない。人によっては業務過多で、外部機関どころか教職員間にも伝えられずにいて、生徒も教員も共倒れする不幸がある。あるいは、生徒が抱える課題に想像を働かせる努力を惜しんで一人で囲い込んで、「困ったもんだ。理解を超えてる」と愚痴る教員もいる。周囲にも「先生、大変ですねぇ」と傷は舐め合うが行動はしない人たちが集まっていて、問題の生徒は置き去りにされる。自分の手には負えないからと、周囲や外部機関に伝えるものの、あとは丸投げで、「私には分からないんで。専門家じゃないんで」と居直る姿を目にすることもある。本人は「自分は連携している」と信じ切っているので、質が悪い。

計画と展望を持つことから

いま一度、「チームで動く」「連携する」というあり方を考えてみたい。最初に生徒が抱える課題に気づき、問題提起した担任は、まず、「どこに落としどころを見出すか」の計画と展望を描くようにしたい。その上で、担任個人で対応できる内容と、対応しきらない懸案を見極める。担任一人では背負えないことで周囲や外部機関に連携を求めるときも、単なる事実説明だけでなく、「この件は、こういう持っていき方をしたい」という意向も添えて伝えると、連携する側も「ねらい」を共有できて、変化する状況を検証しながら取り組むことができる。必要に応じて「担任の意向」に戻って、軌道修正できるのも、チームとして動く際の安心につながる。そうやって、担任が最後まで「チームの一員」として責任を取ることで、生徒支援の協力体制が築きやすくなる。

生徒からみればたった一人の担任の先生

現代の生徒が抱える諸課題は、担任とはいえ教員ひとりの力で対応できるほど容易いものではないのは明らかである。かといって、生徒から見たら担任という存在は、学校生活の中で最初に繋がりを持てる存在であることも確かである。僕ら教員は、自分の力不足に自信を持って、バックに「使える資源」を揃えておきたい。生徒が抱える問題が表面化した時に、「ドンと来い！」と受け止められる担任でありたい。